東雅　一

東雅序

天下之多不過五而人聲之變不可勝窮盡多之初出者也指言之雜而相亂則害生焉聖人於是因言以制字因字以寓音然後其言與音一定而不可易也惟我東邦不待文字而能書之[illegible]

東雅序

天下之聲不過五而文聲之變不可勝窮蓋聲之初出者去舊言之雜而相軋則音生焉聖人於是因言以制字因字以寓音然後其言與音一定而不可易已唯我東邦不待文字而能盡其語

以達五方之言通五方之韻也余友白石源君精於此諸方言曰我邦之語未易驟言有無意有將注有假借或二合或三合而聲有緩急有長短有以發語有以助語凡如此之類不可槩以一例斷之且我邦自中葉以上常与

三韓往来其言多曰得於彼土若
況復通世漢語梵音与變人之語
往々雜出而並行若乎今欲通之
先論其世考其言之出孰先孰
後然後參伍綜核各以其倫則
庶乎不謬矣世之好論倭語若
不辨古今詳源委乃欲以肩見

而臆決之宜其牽合附會而有不通也是歲之春君出其所著東雅二十卷以示余曰吾遇丁酉之災寓居海上數月僅業一書長夏無事乃採倭語而推論之意有所會隨手集錄積日漫漶几上秋後還城比宅不復經

意久〻遠兩年甚庸中偶見髙
槁於敗篋中乃継而成之兩首
永叔還夷陵乜無書可覧閒取
爰書覧之而自謂足以学文字
牘在儋耳與田夫野老爲愚恠
之譚以消孤悶吾何敢自比古
人然此書則爰書是謂〻類也

顧其言頗成次第有可觀者亦
不忍以覆醬瓿矣曹公取諸雜
助者數吾子蓋序之余非素識
倭語者然即而觀之見其議論有
據高訂得當各有條理井井不亂
其於文錯綜糾紛處最極意摟抉
無搜餘蘊發揮古人之微旨一

洗世俗之陋習讀傳之学從適之
智後世必有知之者豈與所謂
書肥譚者比哉君其其多讓焉
遂為之序云

享保己亥四月初八日

美賀室直清書

顧其言頗成次第有可觀者亦

不必美題[illegible]讀畫當以一[illegible]語雖

[illegible]者[illegible]無己意[illegible]令日余非素識

遊[illegible]多[illegible]而觀之見其議論有

書[illegible][illegible][illegible]書[illegible][illegible]者[illegible][illegible]

若[illegible][illegible][illegible][illegible]、[illegible][illegible][illegible]

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]之[illegible][illegible]直之

東雅　目錄

巻之二十　蟲豸
巻之二十一　以上

東雅目録　終

東雅

凡例

尓雅の書始于釋詁釋言釋訓ある事東方上
世の言周朝乃正史に見えし所のもの先
儒の訓釋をもて備りしより後代の韻聞文
辞のことゞもも諸家の注釋まちしくは
ても此書を編むを要とするところ摘ぶ

を釋せる書あまたし纂名も三寂抄に見え
し所に撰ひて地より始て其家の類に
細がなるは名の釈を與へて我釋を義既
り閑なく解を述たりけるものゝ釋を論ぜ
して義有ればなるもの也なる物を収載
せるにしく成此とせれ辨證不羽の正史
實記をとゝく不少くし其餘を先手てく

訓釋に據る野説小説まてをも取と相參に
説文を出典と説とし或は次第を分證と
凡物名義釋せしは乃説ありてさるを義釋
れとせるを疑ふへき所あるにて逸に義不
詳しといふその中他にも義例據りて此劃
釋しなるへきあり波も義を參註して或は
其説のいまたゆるさゝる或し附注してへきあ

是以彼其下ニ分注を
古今之言義趣同しうし此物よ名以を為す
も亦然ぞされし古より学えし故の言を記
し其事を係し録せるを世以観以入参を
先れ古人
此故れの名は此名よりく彼名あるのみを
義乃お係せる也のし係せ録

と名也と分出されて
古言の雅なる俗もあり俗言となりて古言は俗す
なる後も雅言となれる也あり物名ハ然
るに此書ハ作言通らして正すべき人の
代主とも凡俗間に用ふ所もある乃よしを
考も説をまとむる歟菜本もありて類古今
の実言よりくもたましみて詳なりしむる也

はあり出来て甚名を穀らるゝ事也主とし
も抽成辨らるゝ事を必しも須
此書の版下両の事にあらず海上
に富しても與に語らへ歌よし羅洞を
客問ありて一遍の書あるにしし毎
校訂に便りてはへ参とれるし秋成居
紙小郎門弟り卜なるに到りて詳

談至るに及ても明らかに暴病
猶暇ありて書をし取り顧みす老
と言給ひ謬誤脱誤多くあらん
業已に志倦み病ましぬるに老
甚なれは之を删去てらく後若しも
改定を俟つ

東雅

総論　　筑後守従五位下源君美撰

天下の言には古言あり今言あり古今の間においては又方言あり方言の中にも亦ものゝ雅なるあり俗言あり古言には古より遠古に及びて中世の人のいひし所も近言や今言にして近世の人いふ所の遠

言之をこ今大方の人も評云合同しがたき所ある
ゆゑは或るは古の時しいふと毎まる音を世よ
行はるゝ大方乃評言同しからすといふ事に相今以と
し古にも上中古東西南北もの人のことは家老人
よりも雅なるあり俗なるあり事大中下あよ家人
の言詞を雅とし賤しき言葉は俗言とある
にやと思ふなれしそれの中古言も相違ある

今の人乃いふ所にしあてゝ称ことを得ん解き
へきあるを解き出りしさるをこれいかにといはゞ今の人
のいふ所はこれとしこれ古言より出しを翻釈を得
されど義明らかならぬ分る處のしさるをもて存にて次
爾雅の書に釈詁釈言わかしゝあるも古言
今言を異あるを解きかゝる人をして知らしむる
を釈詁といひ古今の間四方乃言の隔通する

なゝ代等我ゝ申人そしてあらしまする代教て

といふ千載の下に生れても千載の上に通し

一方の円にありて四方の外に達しなまし雑

ましまする事にも多くなりしと歌集まの古をの事

のきし年に今見遠の人の例教なり代待ぬし

とれらもおのずからあるの 続事紀古事記日本紀姓氏録 古語拾遺風土記等に古語を残

をしむ万葉集のもしくて代々の歌詞を

釈として諸家の説もさだまれるにはかれこれの書に

ゆゑなる所のことばは類を推し例に徴して
其義を求め得しかどもえ解きかたく
ゆゑあることは強くも説得はなるへうて
世の人は事ありて和歌を解くに謎語を解るかことし其弊
はた深く得ねとは強てかしこさもあらしいはゆる天地の
大なるよりも見ねとは歌ものしりしこれ又一方の風にてある
べけれとも只其の一方にて内にして古今の間人々の雅俗の言多
かりけれは毎にかくのことく一門に皆混乱しつめ謎語のことくして解せ
むとする説ともあまた事にしあそれをもしれとして古説師
ととなるに於てはしてしかるうしき意義を
えて其義を求しむ為にあるはかにいはゆる我は古今の言

に相通しけむよしもなき世を論ずべき事なし
旧事紀古事記日本紀等の書に見えし
古古の證言のごとく然ともまた書撰述の代の人
れの訓をとゞめたるさましと見ゆる事も
あまた神名人名地名歌詞のたぐひも古く
ていひ嗣しまゝにかゝるとおぼしう見えたる古伝
なる事やゝ知らずして海外の人もまじりあ

学しなり此の事ありし乃語言相通しありしと
見へたりし事とも又学びて韓地の諸蕃本朝に
移居せし後及ひては彼の子孫もし官府
に在りし者其政を掌られる本朝の人にも多
かりしほとに彼らの方言相雑らざる事
我将出りしは六経の学も相伝られるより後
百済より博士等をめして文学をとりて来りし併

うつりつる代々に篆隷楷の書体
をも用ひ我国にも古文廃せしより多くハ古語
もしらぬも或は古言廃れ或は其義隠れ
て我東方の俗言大いに変せし事の始と
して見えし也それより後佛氏の書にて
伝はれる梵語のしらぬも又教しえたりしより
けれどものちまた韓蘇乃筆出しる後宋元

代〻の方言をも我国の俗言として来りし物
もしくは此のうちも近世に及びては西南洋の物
語も俗間に行はれしあまたありけり　梵語もさらなれ語とまりし事は
洋に塩嚢抄に見えたりし蕃語の今も世に行はれぬるをと
逃し流璃をビイドロといひ毛布をトロメンといひ玻瓈花を
ロウザといひ石竹をアンジヤヘルと燈架をアントウといひ領紐を
ボタンといひ或は近き頃よりジバンといふの類いと多かりなれの中
小流璃を毘張京といひ綿布を兜羅綿など
いふ事は佛経にも見えたる事あれど此ましし言ならむ
上古の初より今世に至るまで方雅俗の言

風とともに移り俗とともに易れるものにあり次
海外諸国乃方言ハしくも義をも通ひて相混しぬるを
えそありし九州人の言におけるをはしめとして其
義あるにいふとのなし用ひて又義をこれもある
所乃これも世まて俗情のある所に随ひて
千古語亦皆同しうしては今はしらしめ義微あれは
ある例を推して古まてしにしを辨して知る実に

其義に合ぬへしとし後世を以上古以の例
なし上古に俗あり中古をみつから中古の俗あり
近古以の後から近古乃俗ありこれ移りしく
後世を通ゆしてをのしく其俗ありて並世
其常に不移なしこれを移るを古今に言ふおる
通しなむものは其世を論じて其事をとしるへし
秘師なりし人のおしへつれしハ凡經書の正義のみ多く迂闊
の言とおもふ事多く儒者の説者解釈せし所其理は

廻暢なるにいたりては長年者にあらしといふも多かり
事けふの古今は言の義をきけぬるにあらねど合ぬる事
やむをえぬ事の多かりしは家康年十二三の比より貞徳
のいひし事あるにても知るべし然るを京の人も今は
とくよりしては今の人はいにしへは多く尾張の国の方言
雑になるや又は信長秀吉の二代のころにて天下の事
をしるものゝ多くいひしよりいはれるにて又出家ほとりの三河の言は方言の
稀に交れるなりしといひしも猶しるいはしては世事にうつりて
おもふに失語の初めはいひの京乃人のことばをいふもまた多
かる事をましは京の人はしれどもあまた名あるをむかしは京
の人いひし頃のことばをあしは足利氏の代もほとゝ東西乃
方言おほかりし事なとおもひ見えてにも古今も言
その代々乃俗言にうつりゆかて後のありしれることを
また皆これらしの事のことくなれるなり　取むべし

海邊の人は西に到る迄過ぎて其云を聞き
其義を問ひし事ともあるは我東土の言を
しらさる者は是を聞分かく西方の言ほと
聞分る者も多からぬ中にもことに聞かく東
南の方言は濁り東北の方言は濁り
聲西北の方言も又これに同し千年たゝハ
鶯乃啼くそと聞に初春にも聞分かはと

ゆゑ書せられかし是滑稽なりし春暮氏
一筆記しゝは百千宛轉の書あるからとて
東方の書と新寫と中古の書とは爲に遑ま
草書と西方の書は流寫なりそれか中西方
諸國の書も凡ハ方俗音韻の学に相當して
其文字のしるさハ常に形にはあらて僅に
三十餘字を結ひて平常の書を記しぬ是ハ其

知る音と申ハ代々よりいへる事ハ垣也かり
但中比乃ならひは去常ニ所々字にありて
音韻の学ハしらねハ西方ハ長しぬるに及し
是ニ於東方のしらぬ者て常ニ所言詞の間
にありて文字音韻等ハ学もし相尚侍る所
とありて笑されハ天地の間おのつから音声我
東方ハ学者乃しらぬ也されど舌音の字義

にあらば則是を天地發する音にして天下
の音を合せてその中にありといふとも是なり
を經し古より今に到るまで海外までの人の
口に乗せぬる詞は生の人も汲を譯する
とし從して是彼情を通はる事なきうに其
是我方域乃内りなむく皆言語の多か
らんして是も皆なしくのしあるし存滅く

謂之音之發爲言言之成文爲詞ことゝと
見ゆるにも凡言詞の間ある音の成るを一致ふ
わかれしハ常と乃なし我国古今の言に相
通ある音韻の学よりいでゝ西に絶ゆとこ
む但し少ともお母もあし次　今世ニ行はるる對馬
伊呂波といふものゝ文吉
五音圖なりといふや其字母凡五十字唇舌牙歯喉をもて
音を列ね異を別ち縦横相協して天地自然なるあ
前しき旨ハむかし異国の此五十音圖を通りて国人これ
しくするよし不少しといふ今世ニ行ふる所のいろは五十音圖

のまゝやあらん又或人ある乃書をみて指ゑしぬる事にと
やあらんおりに給ふ古へ韓地を經てわたりし傳
はしおりねらんちかころ朝鮮書類の字をさくに似たれ
ともさ示の書をとあるしすこ我國の人まなびて彼書
我國にも字母ありて三十二字にして天下乃音とし
てうけてそへしをといふとのみにて諸人中古乃文字多き
事を論して支那人もよく記性強して見られども
の字ことくをも記し得るく天下乃言にも通ぜむいと妙しさ
事を示すのしるしさへしりいむりりき和漢の方音
をすく唐音宋音の書皆分暁すしてそれらの中喉音の
らといふ者もさしおさと他の人はいふ其て全くらを喉音には
あらぬなくいむりりてれ呼ふ許をさてにいふ所乃ものく識
を終て彼地の字母を見るにそれ三十二字乃中には他の母我
出れ字母ある喉音の式一行もなし文字なくとも字

の形も其声に象りて作乃字形と文字をとつくのことくにし
て並に皆我中乃音のある所にあらねは諸ゝ彼国の字を用ひ
而我國も字母を傳ふる事多しそ其字母を借りて或ハ二合或ハ
三合して其文字を助語を切し妙得しくいへりしをはとし
下の方給ふ事しへり今小野中に此字をあらく相尚む妙なる
天精妙名にありと見ゆく全くこの國乃音は入声を学
くおよく実にも入声なるよはあれは
其声の結ひくいまた開けさるなり　我國古今乃言
其声音の轉せし法りあり其れ音を悉
されりは差異し然しは其大略ハしと象
も大方れ音闕しくさ存によりて清せしにて見

えしある文字の文相離れるによりて清むしと
見えしあるは凡文字乃音軽あり重あり清あ
り濁ありて清濁軽重相まじはりあつて給ふ縁
なる息の彩によりて其呼ふ事に縁息清
濁ありてまた清ある字より濁となるは其理こと
ともつて重とし濁む縁なる故なとし呼ふ
半開の息なるは清とし呼ふ事合ふなり

唇舌牙歯喉の音のこゝろかなをはらく分得
ぬるもしかなをはよくいひ得さるあまた呼ひ
されたるにしたかひ紛して他音にかよふる事を
いとこに從ひ其類をもて其方俗よりまた其音
の紛れを致へ或ハ二合乃音或ハ三合音のよき
は彼是の音相合ふよりて轉して他音となる
もあるへしこれ其類を並よこれに受て

乃自ら轉せし也ある其音を略して後音をも
里彼詞を略して此詞とせしものことも見え
兩よ多くありし次これらの事猶多くいひ難けれ
ちよは其大略を挙して日本紀に
見えし下照姫の哥に天ナルヤといへるをアモナルヤと云
ウナガセルといふ語をウナアセルと云ひしのごときは其方
言によるもありしなるへし此等も表出しくはあるされたるなり
此等世済ハ其地の語ハふ示しされとも見へたるも風土
記万葉集等にも其地の方言見えしもあれらはあ
此今とも其地の語をハつも乃ちをいぞ埒にて此國の辭ハいつ
ものある個されさりしは世の人もおほかなくハ古語
よは善をはミトといひ又ミトいふ婦しては轉してフトいひ又略

てコトいひりそれヨトいふ事はまさ詞助けれてヨミといひふ
玉詞亦轉して今のことハ中古東西南北の方言になりてヨミ
といひヨキといひヨカといひヨクといひまたヨフなどもいふ其音
の脣音清濁の呼ふ事れ間合緩急また呼のく相互れあり
又名といふ音呼よひてカといひセといふ音呼よひてスエといひ
テといふ音をナエと呼ぬる類ハ上下いふ亦の音呼よひ切
これも他音に通ずしやこれら轉して常に意あるにはあら
ぬもされ自ら轉ぜしかくれしもの凡古今の間文方雅俗
の言聞しつゝぬまとつゞくのこゝし家書に云隔して来隔の轉
をしなどいひ云隔して来音の呼ぶ事も緩なるして急なる
て開発して合ひしくなど注をしあれど皆是此條よりおこし
事もんことしなるゆゑなり
まづ言といひ詞といふ義をもとよりむかふ屋

云事也書發為言言之猶又為詞とも見え
さて先達の説に發語の詞ともいひ詞の助
助詞なりといひし皆是も詞也古人の
義をたすくる事おほくして其言をもちゐるよし
多かり或ハともといひもしこそなれは多き
發して其語を起しぬるあまたこれを發語の詞
とは云ふ上の詞助くとしいへる字或ハ其言

の餘音あるなとも詞にも動詞にもいふまじき
初に體言あるよりてこは言も出来しかと
發せ詞は擇て體云と將せしむることなくな
うしは成し得しけとの言と合ふて言とな
もおかもし體は二つれ云の相合ふ形と動りし詞
あるは中の詞動かとまとやなと字なとと
いはしく生出くるものは筆よりての

同じ其言ども長くも短くも多くなりしと
見ゆる事　これらの事ども並に我書に注せし字
見えたりそとくハ日をヒといひ火をホといふ
がごときハ並にさる事おして云しなかにも昼ハヒルといふハ
日ヘルといふも詞脚の足ばホシといふはホといふも火なりしと
いふも詞脚を足しもありヒといふさへにもあるによりて又足
といふことしれ却第しくヒといひヒルといふ詞脚に
よりて略し去る足しはホ火といふこともあるによりて
また星といふこともしれ却第しくホシといふはシといふ
詞脚によりて略しうるまで花をヒカリといふはヒハ日のカ
は赤く古語には赤きをカといひしといふよりは詞脚てヒカリ
ともに日の赤になりていひし言にていひカといふ二つの言の
合せし後言の詞脚となりてヒカリといふ言になりしを出と

ホノカといふはホハ火之ノはすなはち中の詞助にて中を略す字也
といふものなりカハ赤之ホノカとは火の赤きよりていひし言
之ホといひカといふ二ツの言をあはせ略いふ間にノといふ詞をそへて
助けるくホノカといふことも聞ゆなるをしれ又古語ホ赤をカと
いひしを言の第出しして言となりし之又そのカといふしく
しやいひおさめしてカといひしこれも後代の詞とも
上の詞助なりとをいふ之を也を立てアカシともアカキなりともいふ
シといひキといふハアカといふ言の余音にしてすなはちこれ下
の詞助之凡これらの類をすべて上中下の詞助といふ事等
二合三合なりといふ事をも推して知るべき事なり
世乃古言を解釈すること上略中略下略省略の説
あることを思ふところのすなはち天地の運古今の

害あるかくしく余となれ人生の大害あるの
しく古の時も人の初なるかくしく古とお
ふる事なれや、生きよ勢くハ人のやゝ長して
かの漢よ盛るかくしく今識よ学び小児の言
成長よ在らふ所最後しの中て長しぬらふ
随ひしく古字を中く長くかりかくよ逆ふ
まゝ文かして英なくひしふとのふし古書の

略せるにおしくするを素朴之古也は略して
いひしよりハあらひを朴なるに露して文とかり
ぬることを言ことを示自して悉くありてもこ事沢
よ従ひしぬもしこれは略して言いもかる事は従
残なりふ痕のしこれし後世の云れしら分ハ略
しこゑいひしもくれかしひまてこゑもそ花子
比よこよ上世の言れしら分ハ其十倍雷之中世

の言ともいふ花の開けしく下世の云ほ其花もひ
爛熳に及ひしあるを略してハよき花とて
小花らしく纔に咲出るさまの如或ハ一言せ
一言して尽せるあり或ハ二言ほ合はふにかゝ
言葉を重ねて上の詞にかゝるを添ゆると海
さも其略せるハあらぬ次をハらぬものをいふ
猶よまれる傳にけほ紅し緑との色は見る

うすくし紅なるをも赤白のまじりたるとなれる
雁之緑なるハ青黄のまじりてなる也此云之
赤し略して紅しなり白し黒して緑しな
もとるにはあらで
右略語の例に略語とはことし略
していふひゆるを氷といひこし
なることをさとるしいふ文字を筆といひ墨研ぬ硯とふの類
ぞとしいふなり古語に氷ゆしこしといひけるをことふ言を
開呼ゆくもこイとしいふ事りこアとはこイとしいふ語の略せし
たこアとしいふ語を略してこしといひしにはあらで詳に諭の
語に見えたりもして古語に天の語りぬるとしかいふをそ
もじしりしといひしきこえとしいふ語の呼ふ事の縁りして

ケといふ事の聞えぬはクレしるしなき事也これも両の註
に詳に見えたり筆のフミデといひし古語なり硯をば
スミスリといひしも古語也倭名抄を併見て出しつる
を後にフミテをフデといひスミスリをスヾリといひしと云
はその頃の事の為にしてフミといひスミといふ言にムといふ言
の音ひろく通ひしなることといひムといふハ将なるによれる
なりこゝにてはまた源氏君せしにはあらじ○まこと流に将をば
とよめる也音相通にして君はもと上の将にして君とよむる
を将として行とよむの義にしていふ上君将して君といひつる
の将して行といふことの義ハ君のうへし君といひ行といふの
ことなハちぬ古稀世の時より少々を重年りそれの時
よみたりし文字相通なしいふ事によりて君つ事とひ
しるさるべししともおもしとは○まこと流にしるしる迹し
りんあめの目しし美ことをケとしかもくさある雪とはる

の数なりといふに古語に月をハてといひけりといふ語も将し
てメといひしなとは或方言の聞しりぬるよりもやよりぬる
むかしといひ又西といふかもしらぬハてといひメといふ云より
ていひし転りあへきにもしこといふ語を将して月も
いひしなるいはし耳なりひていこといふこともはまたいふ
やあらむ古語に清ゆるとはケといひけりといふなとし
此語は呼ひし者の聞誤てキユとはなりしに雪をユキと
いひしなどとも同じきといひしことも詳に書の注り
見えたりこれらの語も並に古の時より物ありし
古代の比ほひ切韻の学ありしといふ事も傳りてやその音を
存してユとなしキユの音を存してケとなしケの音を
将してキとなしユキといふ事のあるへきにもあらねは
是等の説はむかしの其世に論ある事にもあらぬ後代の事を
もて太古の事を説きぬるに致なるとこそ見えたれ

其言同しくしても其書異なるも意同しても
物異なるのことなるありされとこそとの類を識
國の假字をもちゐる常しめきは字を同し共
字母文字と呼ぶよハ其聲ハ平上去入其音異
清濁輕重にしてなゐ各自ら相別ありて同し
かしらなるをもちて轉語之を其云乃始己
是を將して可也しやれしめられを將し

將してゝてにをはあやまりぬる事今におほく
見ゆるはつゞけたるにて長くなれば次
或説に我国の言に清濁の例あり他の名をよむとき
濁るのみに清り用ひて名清辞しその字目に清りて
火ともし火を濁りてよむと清る類にもあらしとていふ氣ある
不審これをもて將濁しまさに世ハ火のともしびをさとも
とよみしことむかには上の字を目といはり同じけれども
條氷に於ける橘をして吳音歎同並等にとまさ並り
これ古法みなしとといひしかはこれもしとして皆ことなる
しを法事ハ右同しされとも其事に呼ぶ小を
又をめしおとうましく同しつゝてにをはいとなハも
韻に平上去入去声の將音清濁によまるあり他の名

ところも此かれましに借用也といふべかるにましてや古
語なる日をヒといひ火をもホといひけりされどせと
いひホといふを借音なれとも其初め日をヒといふなりて
其音を借して火をもホといひしにやまして日をヒといひ火
をホといふはめしき義にてしまや火をホといひし故
借らくヒといひし也或ハ方言にや古始れ或ハ借字
やうりめしまとてこもりてのこしる義ハ今りしるべからに
雨をアメといふハ天をアメといふを其のまゝに借用也と
いふこしる義ハなるべし又雨をアメといふ詞ハ何ぞ天と水と
いふなるべし天より水の降なる謂にして古語に水をはミと
いひけり祥なる事にし
雨乃注に見へたり

古言の義を求むるに古事
紀にもあらせし所も心を得しと見えし事

いとも多かり古語拾遺これに次く諸国風土
記の中にも徴とすへきものあまたあり次
日本紀に見えし所の謌并に萬葉集の
哥の詞はことさら古人の釈をも所々を諳也
我事とし仙覚律師万葉集乃哥のことき
其をも好み解しおほしきは毎にしるへし
次出雲風土記に熟しつゝむよく思ひはかる

例なき事也

漢字を用ひて此国の言を書るされしとも

旧事紀を始として千字を用ひられし

所にまうして古言の義自ら明なる事を

しるかうに日本紀またこれに次て先達

の人お修えて日本紀の文ハ則旧事紀

よりされしなといふ也　令義解に釈とし

爾のころ我本朝よりし漢字を取用ひし
法を観つべきにも最多く僧侶沙門の
為に注しても下に訓用ひし所の文よりも
よし其義をとけらし法つべきにもあらぬ
漢字を取用ひらきし後に彼字を讀と
此間にいふ爾のいはれ事にいつれの也にしと
某読し彼を是しるの義自ら合ぬ字論る

におよひ盛も彼岸と此間より家出の
ね合もかるとひくるかくの凡これしの彩世の
人踈して弁譲しといふやうの文不通の
論とかやいふ迷惑也せうし孔子乃春秋を作
全し之家の書段あるにそゆしるもし和歌の
しし方語ありしと見えたり尓雅方言等
の書に見るへし和も唐と古今四方の言相

同しうしれとては此間にして波字を用ゐ
ゐるハ言義異なるあるもやうられ或ハ
此間乃方言よりてあるなるも（さきハ銃の字れしも銃剣の字れ）
俗剣音銃削しといふし此よも全銃となして讀ミカ十
てりといふ言字の金よ從ひ銃の省よ從ひぬるを取て
銃の字れしるさ樹抄しといふて此よ言ふ杬杙となして讀
ミカ千といふ言字の木よ從ひ虎よ從ひとれるも此も
わかれ彰此間にして波字を用ゐるおよき義のあるも
ミ皆残虫の訛謬しといふも是にも春秋の三傳よ
見へし斜音の渉もん同しうしぬ示雅方言等の書に
ミ方異言見へしなしきさ波あり正なるむよハ此ハ渉れ

なりて此もし正なりとむかし彼此ハ混ずる事なしされど
其の彼此相同しからぬよりしてこそ雅言を通し方言
を記せるハまことあるなれとおもふを世の人彼よりもく此
を邪なりと賤しめて他異説論じなどいふものあるべき道
理の論りハいかなる或ハまた飲食衣服の類ハ彼此お
混ふ所乃同しからざるもしその名を正しからぬを兼ねて
る事なりとしても世の変を知らぬ事ならずなかるに
必ずしも当れりともいひかたしされど彼我いふ所のことば
は彼と此との方言あるをいふにもしろく方言ハ通
して東、物のことばにしていふよしあなる彼にしあるも
いふも云ふことばの類ふべき事なれども世の変
を知らずやすべき、又雅の古きもしるし上も天地
より始まりしハ無き世の微かなる所にもしるしてまし
皆古今四方のいふ前後釈ありし事なり

それの中國にて彼字を讀みて六書也と
なむしより古訓迦洲同しうさるもするを
かくいたらくハ舊事紀幷雖讀ていきと
なきよて日本紀もしこまよりなしは假名鈔
よミし龍讀ていきとなし倫して楊氏漢語抄
ありて同名乃字讀む事有同し日本紀
よ和讀して工してなれ和名抄よは楊を讀

て立となりたるよしも齊明紀日本紀に見えし
所は其義自しおなじく倭名抄に見えし
和日本紀不詳されど後の人並に倭名
抄に見えたる所にまかせて舊事の紀日本紀
に見えたし所或は開化の遂に内國に經
營するに經ひし字を創造までしきたる
ほに至るまで事に據りし類は本朝の國史に

よりさきのちかく後の説は取へくもあらす
しともあれ共
舊説に漢字の音を略して和訓と心得
ゆりといふ事あるを似たる類事ハ似たる類を
其義を考へしも再ひとも見れは漢字の音
を用ゐしてその音の略しぬとみえし類ハ彼
音は略しともさる後しなきにて意の字としか

あらはなはとゝゑぬとし事のいふくめ方
ぬ言の中我国にしこそ音乃らくあるは
あるは漢字の音のしるさぬ我国よりなきかれ
ものなき異音自ら濁とする事を嫌ひた
るく後異國よりしてたえていはゞ漢を呼ぶくアヤ
といふ古のしるさぬ異の字訛胡切角次濁音
我とゝなきよ加へりれどもそれからぬ音は我国乃

すき所なきしし呼出る事かなはずして
ともかくも略して尺となりしを俗は漢の
字書唐汗切母次清音をとりて呼ふへけれと
あともと東国にて我言としうち呼ふる
これとなしくともかくも略してアヤと呼
や（漢をよみてアナといひまたアヤと
いひし事日本紀に見へたり）其余の音なと
我とも前にこそ同し傳へし世間にし流布せり

漢字の音の轉せしなるもあれは韓地
の方言の轉訛したるものもあるへし
古の時よりいひ嗣く海を呼ひてハア
ルといひしを両は韓地の方言なり
てハタといひしも日本紀の釈訓に海
を讀てホタイといふ事の見へし此も
猶今も朝鮮東南の沿海を呼ひてハタイ

といふや今にありて古を推るに日本
紀釈訓にホタイと見へしハ或ハホタイ或
ハホツホスイの字読りてホタイと略
とあるへきをホといひしといふ言語にしてさい
此由をなさはなれしも言語略して切りと
あつしさる事を憚ることあつてこうやも言語
略してありしにはあら称して言語略自

轉しうりほろひ言語拾遺ニ書契已来
浮華競興類間故實應識根源といふ
し滅びゆき我國の古言古義隠れも失
せし事漢字行はれて古文廃せしに
よりて習ひしとて知見る事なれど細かならぬ
我論しおもふまゝに此語を彼字にて重ねたれ
なる義事あれども彼我國の言は古の初

よりいふ詞しこゝろ八月まて海かへ（言の
こゝは復即容也漢字靈に行なゐしよ
通ゆくはそゝ義にあたらでかなへり随なれ
といふものあしひこなりしてし後來ほね
りまとなりゝまはまし物とかりふる
古言ぬ義ヲ今も遠ざかるとぬあるは亦甚
ぬ每しぞあふはるまとへ（八なぬ此樹を

伐りて彼枝彼接なす彼枝既に長し
て樹となりぬるに及びて此樹皆悉くの
根種のあるなくてされど江南の橘
淮を渡りて自ら変じて枳となるといへり
草木も心なくて種子のことなるもとによりてこれ此
由よおしなるなるも千変万化自ら将に
て此間の変化のことくにありしいその志うる

事なとも訛せらとしてあつる所乃ことはあ
海をうしてワタといふの
まりしとて並見えられことにハ我国ハ古ハ云ふ
見へさり給るを韓地の方言なりといふ事ゆゑ人の疑を
貽さへ年ごとハなき事れ史をよりて注せるし日本紀例
此地名のことなは国史撰述の時乃名なりけれといふを
ありとはしられる人に便りもあらせとなれハなとあし
旧名既に隠されしも世にしられハといふ所よりてなる
されし事とあることなれハさりそれの中海をうしてワタ
といふのみならず綿津見の二神出まし〻と
いふ神の中小大綿津見神綿津見神といふの見えし
を海神といふと見へたりまたハ古乃俗を国其神生〻
たひしけれといへりと或ハ字国を開き或ハ字を求め

かひく王君とゐてけるといへり。中にも見えたりさて韓
地のことはも諾冉二神の代より或は聞え或は通ひけり
よその海わたりあまた所あるよしは古言の葉にきこえたるをもて
此をいひそめ君をうつしてはいへるしかるを世にいふことは新羅
地祇とたまふことし後の代まで秦韓人の子王
ありしに姓をあらため秦氏と漢くハ多のきみといひしとあり
新羅ワタツミとしいひしよししるしとし見へけりされとも
まことにぬ事ハ王を徴とするにそれとされぬともわかれとも
ましく久、大盞て海を渡り宗像嶋神の天降ませし時
韓地をさとくおこして國しるしかば治めしたまふ事のときは
は新羅の史にも見えてしるしそれより文新羅伊那指
嶋の人こゝに来りし事よしも神功皇后新羅を征し
たまひし時をもきりしにしあることはさる間し流りして
にも依りをかしこ乃云の此ちりに依しおるる字国来る前

世をへて久しき事なり有へき古言のうせたるもあり
むしろいふへき事にしもあらねはましてや六経のおほえたる
に及ひて百済の博士なる者きて学をすゝめ侍りしより
されは方言の世間にひろまりしなるへし況や今も
朝鮮の方言はその徴とすへきあるまし論なりたとへす
其徴とすへきなきのみにはあらす古今の言語と共に韓
に亘りわたる彼此ともに同し中にてや三韓に異
なといふ帰今の朝民に及ひたるとなし彼古言の
今に遺れるものゝ多かるへきなり毋あるは旧書に韓地の
方言なりといふそれあるのみきは日本紀にみえへし
ちなみにそのすへきなりしは　漢土乃方音韓地の
方言のことにも此間まてにとわらひし例を紙に

とあるせり又我書の中にも義を釈せし
も見えたり琵語の此名の謬となりし例は
三をあり挙列出したるハ猿をマシラと
いひ杜鵑をホトヽキスといひ水をアカといひ南
風をハエといひ雰をタツキといひ焼をタクと
いひ蟹をカニといひ斑をマタラといひ曲鈎を
ハリといひ調布をテツクリといひ杖をカセツエ

といひ智をサトシといひ愚をヲロカといひ盛をサカユといひ生をアリといひ本字あるをサタカといひ本字なきをサクカナラ子ず
いふの類ましなは多かり　マニラは摩新吒也　ホトヽキスは別都頓
冝壽やアカは阿伽しハユは波ニ便也タツキは駄都也タシは陀呵やカビは迦毘羅也マタラは湯陀羅也ハリは婆利やテツクリは頭雄羅やカセツエは刺羯鼻也サトシは薩埵やヲロカは阿羅伽やサカエは遮迦越羅也アリは歌利しサタカは闍陀伽なり
これらは天をソラといふ

畫をヒルといひ渕をシヤといひ扨をフナと
いひ量をハカリといひ鬱をマルといひ曲を
マカルといひ毋をナモといひ賊をアタといひ
玲瓏をユラといふの如き文は舊事紀古事
紀日本紀なとにおほかるへし上世の言に似
たる事もあるへし世乃穀なとも疑しけれと
事なれと梵書といふ物と此ふいふ漢字

まゝ言成僻と見るに正しく彼と此との語のあひ似たるにとりて称し上にいふ語しかれとも彼語をそのまゝ此の語となしせす翻してし用ひしかは（ソラハ素洛なりヒルハ禄摟なりシてハ四摩ヤフナハ浮囊シハカリハ倍梨シてルハ摩羅也てカルハ二摩偈羅陳シヨモハ阿摩ナリ エラハ吉因羅シ）

又これらの外俗語にある所のことはハ悉くは華語なるに 今の俗にいふ所のものハ三をさして例とすへしまつクハ主をクンナといふ

は檀那と翻して布施といふと見えたり友をシルヒトと
いふ事あり蜜多羅と翻して吉友といふ事見えたり路
盛あるをイカメシといふハ鄔伽と翻して威徳といふと見
えたり癡なるをハカといひ无知をバカラシなといふ事ハ慕何
と翻して癡といひ摩訶羅と翻して无知といふと見えたり
程よ向ふ事あるをスタラナシなといふは涅多羅と翻して
契經といふと見えたり事来の重きをモクラツクなといふハ牟
陀羅と借印羊といふやしと見えたり剃吹をとりハクといふ
を娑婆訶と翻し説をいふと見えたり髪を除くを髪をスル
なといふも周羅と頂留一髻ヲ餘髻皆除くと見えたり瞟
眼をヒカメといふハ賓伽羅と翻して青目といふ事見えたり
癩病の人をハカライモノといふも迦摩羅と翻して癩病を
いふと見えたり竊盗御スリといふは朱利と翻して賊と
いふと見えたり犯り逃さをアナハメといふも阿耨波陀なり

翻して不生といふと見えたり又蚌蛤ノ類ニアサリといふも
多肉舎利の謂と見えたり此ものは手淫の躰あるさ
ものしサモシキヒスシなといふことも多く僧家より称し出
多通といふはなしサモは沙門也ヒスは苾蒭にてこれら
類最多し古の時僧家ニ相謂ひし亦の僧間にも言ひ
伝へし事ゆへ今もそのさわる事なし

は檀那と翻して布施といふと見へたり故とされたれば
いき尸利蜜多羅や翻して吉友といふ[illegible]
或ある[illegible]とイカメシといふは鄔伽と翻して威猛といふと見
えたりと[illegible]といふも[illegible]バカラシ言といふ[illegible]
僧翻して[illegible]といふ摩訶羅翻して無知といふと見えたり
[illegible]とスタナシ[illegible]多羅ハ翻して
[illegible]と見えて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]


H+K 2
GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart
15.01.2002